

宗教共同体と霊（精神）的共同体

前号で、私は内村鑑三の無教会主義のことを書いたが、彼がこの主義で目指した狙いは、教会に属する・属さないにかかわらずなく、同一の主キリストを信じる霊の共同体を作りだすことであった。私はさらに進んで、この「霊の共同体」の概念が特定宗教の枠を超えて拡大できないか、と考えてみたい。

そのためには、宗教者の概念をもう一度吟味してみる必要がある。宗教者とは神仏により救いを得たと自己確信する人間のことである。これが宗教者の本質定義のはずであり、そうした確信の途上であって、自らも信仰の道を歩む者は、すべからず宗教者を目指すことになる。彼らは、信仰をお互いに確認しあい、信仰を共にする者としての一体感を強化することを求め、その結果、同一の信仰対象に帰依する者同士の共同体が形成される。これがあらゆる宗教共同体の本質的な起源である。

ただ、このとき陥りやすいのは、宗教者が自己の信仰世界を絶対化し、その世界の中で自己完結してしまいがちなことではないだろうか。内村は、それにより独善的になったり排他的になってしまうという傾向が生じることを危惧して、無教会主義を唱えたように思う。しかし彼が目指したものはやはり、イエス・キリストを信仰する者同士の霊的共同体なのであった。私が考えたいのは、もっと広い意味での宗教的共同体の可能性なのである。そのようなものが成立可能だろうか？ もしそれがあっても、従前通りのような宗教共同体ではありえないことは確かだろう。

私は内村の言う「霊の共同体」という言葉に、一つの手掛かりを得てみたい。霊の共同体が教会共同体を超えたものだとすれば、それは宗教それ自体をも超える存在ではないか。ここで言うところの「霊」という言葉は、人間の人格的中枢をなす精神と言い換えてもよい。欧米語では、しばしば霊と精神とは同一の言葉 (spirit, Geist, esprit) を使う。それゆえ、霊 (精神) 的共同体と言ったほうが余計な誤解を避けやすいだろう。そのような霊 (精神) 的共同体のことを、ベルジャーエフは「ソボールノスチ」と呼んだ*。ソボールノスチとは、霊 (精神) に目覚めた人格と人格との自由な良心に基づく交わりである。そのような共同体は当の宗教共同体を超えた性格を帯びてくる。我々は、この概念をより現代化して受け取り直す必要がある。

現代のソボールノスチとは

近年では、宗教間対話が盛んに行われ、時には災害時などでの宗教間協力も行われるようになってきているが、こうした試みが行われているということは、たとえ信仰対象や教えが違って、宗教者 (信仰者) 同士の間一種の霊 (精神) 的共同体が成立していると言ってよいのではないだろうか。それは、自分たちがそれぞれの宗教を信じていることから、その象徴的表現形態は異なっても、それぞれに神仏の超越的存在につながっていることに由来する、霊 (精神) 的な連帯感があるからである。

ただし、単に交流シンポジウムを開いて議論がはずみ、お互いに親近感が湧いたりしたから、あるいは災害支援において技術的協力や役割分担の関係を進めたりしたからと言って、そこに霊 (精神) 的共同体が成立しているとは単純に言えない。そうした対話や協力において、一瞬でも人格と人格との自由な良

心に基づく交わりが生じたとき、はじめて霊 (精神) 的共同体、ソボールノスチが成立したと言えるのである。

私自身の経験でいうと、私がいま関わっている「支縁のまちネットワーク」がそうだ。これは、無縁社会と言われるこの社会を何とかより良い社会に変えていきたいと思う志のある宗教者が、伝統宗教や新宗教など宗派を問わず結集し、また宗教研究者ともパートナーシップを組みながら、宗教者による新たな“世直し”をめざすべく今年 (2011 年) 1 月に発足したネットワーク型の超宗派的な組織である。宗教系の NGO・NPO 組織は数多く存在するが、それは宗教別・教団別に組織されている場合がほとんどで、教えの違いを超えてネットワークを組むということがあまりなかった。しかし本年 3 月に発生した東日本大震災に際しては、宗教者災害者支援連絡会が結成され、宗教者や宗教研究者が協働できる支援・救援を模索しようという新しい動きが起こってきた。

支援のまちネットワークでも、7 月 16 日に大阪市内で「東日本大震災復興祈念集会」を開催した。この祈念集会は、関西にしながら東北の被災地に霊 (精神) 的につながり、後方支援を考えつつ、同時にそれぞれに宗教性・霊性 (精神性) を生かした街づくり・人づくりへの取り組みを目指した内容のものだった。私自身は事務局長として、事前の打ち合わせや会議、また関係各方面との交渉、そして当日の開催などで、さまざまな宗教関係者と協働して運営にあたった。この時、同じ一つの目的に向かって宗派を超えて協力しあう中、互いに霊 (精神) 的な結びつきを強く感じる瞬間が、私には何度もあった。おそらく他の主催者も同様だったのではないか。思うに、この結びつきは、宗教に関わる者ならではの、しかも自由な人間同士の交流の中でのみ生まれるものだったのではなかろうか。

この祈念集会には、宗教者はもとよりメディア関係者や一般市民の方など、400 名近くが参集した。してみると、宗教に所属していないにもかかわらず、何らかの霊性 (精神性) に目覚め、人格相互の自由な交わりがあるところには、どこにでも霊 (精神) 的共同体、ソボールノスチが成立するとも言えるであろう。支縁のまちネットワークにおいても、普段は地元で地道に社会活動を行う過程の中で、どんな人々の心にも存在する宗教性・霊性 (精神性) の発露を通じて、新たな「縁」を縦横無尽につむいでいくような活動を心掛けている。それは人格的な交わりを強調するという意味で、宗教の個人化や癒し志向に見られるようなスピリチュアルブームの現象とは一線を画すものである。

霊 (精神) 的共同体は、実体として存在しているというよりは、人間が自らを自由で独立した人格として自覚するところから、各自が絶えず努力して創造していくものである。その意味では、人間が人格的存在である限り、常にそこへと目指されるべき理想である。なぜならば、人間が人間であるための拠り所はひとえに自由な人格にあり、このことを自覚した者であれば、だれもが開かれた霊 (精神) 的共同体を創造することができるはずだ。また実際、そのように働きかけていくべきではないだろうか。

* 『人間の運命—逆説的倫理学の試み』(ベルジャーエフ著作集第 3 巻、野口啓祐訳、白水社、1966 年)、370 頁以下を参照。